

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家にあつたのに

―世紀転換期のハプスブルク帝国におけるスロヴェニア語―

佐々木 洋子

はじめに

一八六七年、オーストリア側とハンガリー側それぞれの国内法で二月憲法が定められ、アウスグライヒ（和協）が成立した。ここからオーストリア＝ハンガリー二重君主国が発出し、オーストリア側ではドイツ語のほか、チェコ語、スロヴァキア語、ポーランド語、ウクライナ語といった北スラヴ言語グループや、スロヴェニア語、クロアチア語といった南スラヴ言語グループからも、各地域を代表する議員が送り込まれる、帝国議会が制度化された。

オーストリア側の憲法には、以下のような条文が記されている。「国家の全ての民族は同権であり、それぞれの民族は、そのナショナル・アイデンティティと言語を保持し育てる、毀損されない権利を持つ。全ての地域語の、学校、役所、公的生活における平等は、国家によって認められる。複数の民族が住む州では、以下の配慮がなされる。すなわち、公的な教育機関において、…第二地方語を学習のために、…必要な手段として保持する。」⁽¹⁾

すでにアウスグライヒ成立以前から、トリエステ市を中心とするアドリア海沿岸では、少数派として帝国内に居住していたイタリア語話者たちが、イタリア語をギムナジウム（高等学校）の授業語とするよう要求し始め、実際トリエステには、有志による私立ギムナジウムが設立される。⁽²⁾ 一九世紀なかば、この地域では、イタリア語話者たちが政治・経済エリート層を形成し、帝国内でも「文化的民族」と認識されていて、地方権力を独占していた。カッタールツァによれば、すでに一八四八年以後の新絶対主義時代から、「民族グループは、社会的な上下関係の地位を決定されていた。『農民』は『文化的民族』に支配されていた。これは、ドイツ・リベラリズムの中央集権化で、一層明確になった。」⁽³⁾

ハプスブルク帝国の南部、すなわちアドリア海沿岸のゲルツ、グラディスカ、イストリアの三州、それに内陸のケルンテン州には、南スラヴ系言語であるスロヴェニア語話者が居住していた。イストリア州の州都トリエステの工業化に伴い、彼らは都市へ流入し、次第に中産層を形成するようになった。そして世紀転換期には、イタリア人とスロヴェニア

ア人の民族対立が、目に見えるようになってきた。イタリア人支配層であるナショナル・リベラル派は、スロヴェニア人の増加を「スラヴの侵入」と批判した。一つの民族グループが増加したことを、それまで恣意的に起きていた同化を脅かすものとして、イタリア人支配層は強く警戒したのである。^④

それでは、当のスロヴェニア人たちは、これらの状況にどう対応したのか。クラールの学位論文が、スロヴェニア人とイタリア人の混住地域について、基本的な事実をていねいに説明しているほか、一九世紀から二〇世紀のトリエステのイタリア人、スロヴェニア人の運動については、ザラ編のカツタルツァ書に詳述されている。また、第一次世界大戦後にオーストリア、イタリア、ユーゴスラヴィアに三分割された、ドイツ人、イタリア人、スロヴェニア人の混住地域を研究対象とした論文集が、三者それぞれの「国民化」の過程を明らかにしている。邦語文献としては、トリエステの民族分化の過程を概観した拙論、およびイタリア・イレデンタ運動の影響を扱った拙論がある。^⑤

これらを踏まえて本論では、第一次世界大戦前後におけるトリエステのスロヴェニア人たちが、主にスロヴェニア語の公的使用に関してどんな状況にあったのか、さらには地方都市ウゴヴィツァにおけるスロヴェニア人たちは、自分たちの日常語をどう捉えていたのか、概観する。そのことによつて、旧ハプスブルク帝国のイタリア人・スロヴェニア人混住地域では、当地住民の民族分化がどのように進展したのか、明らかにできれば幸いである。

第一章 トリエステ市のスロヴェニア人

トリエステ市に限れば、一八世紀まで、商取引、航行関係業務、役所では、ヴェネツィア系のイタリア語が、リンガ・フランカとして使われていた。住民たちは、商業都市トリエステへの帰属意識を持ち、ハプスブルク家と結びついた公益に奉仕する気持ちを抱いていたという。だから言語が民族意識と直結することはなく、「田舎の農民の言語」であるスロヴェニア語話者も、他の言語の話者と同様、日常のイタリア語を共通語としていた。^①

当時は周辺地域から流入した、貧しい農村出身のスロヴェニア語話者たちが、一九世紀を通じて定住し、経済活動に従事するうちに、そこでスロヴェニア人・中産層アイデンティティーが、ゆつくりと形成されていた。一八六七年のアウスグライヒは、各民族の平等に配慮した憲法の下で、スロヴェニア民族政党の成立をも可能にした。

一八七三年にはトリエステ市から、最初のスロヴェニア人議員イヴァン・ナベルゴイが帝国議会に送られた。ナベルゴイは、エリートのリベラルな活動と、スロヴェニア人大衆のカトリック信仰の利益を結びつけ、スロヴェニア人の統合を模索した。これは、大衆のナショナルリズムを喚起し、日常語に対する意識を深める努力であったことは言うまでもない。^②

翌一八七四年、トリエステのスロヴェニア人によつて、政治的な協会「エディノスト（統一）」が設立される。同協会は四年後に同名の新聞を発行し、それは一九二八年まで続いた。彼らが目指したのは、その名の

とおり、スロヴェニア人の統合であり、彼らは学校教育を初めとして、役所、裁判所、鉄道、郵便局におけるスロヴェニア語の公的使用を、強く求めた。特にトリエステを中心とするアドリア海沿岸のイストリア州では、イタリア語話者が政治・経済エリートとして地方権力を握っていたため、帝国憲法がうたう各言語の平等は、しばしば脅かされていたからである。アドリア海沿岸地域において、スロヴェニア人アイデンティティーは、一義的にイタリア人との対抗関係で発生した、と言える。⁽³⁾

一八八一年に在トリエステ州知事は、文化・教育大臣に充てた書簡で、エディノストからの請願書の内容と、それについての意見を述べている。エディノストは、トリエステの国立中等学校において、スロヴェニア人子弟に向けた全ての授業をスロヴェニア語で行うよう求めた。この要求に対し州知事は、当地におけるイタリア人との対抗関係を認識し、「スロヴェニア人たちは一定の譲歩をしてきた」という点を認めている。

しかし、州知事としては、イタリア人、スロヴェニア人「双方の民族の生徒たちに対し、彼らの母語の能力を育てるために、充分な機会が設けられている」として、エディノストの要求を退ける立場を取った。というのも、「生徒たちに義務を課さなければ、彼らは民族ごとの授業を受けるようになる。そうなればトリエステにとって、政治的な観点から、ますます好ましくない手段を取るようになるだろう」との懸念があったためだ。トリエステの中等学校では、スロヴェニア授業のクラスも開かれていて、知事としてはそれで十分であり、むしろ年少者たちに

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家にあつたのに

ドイツ語を習得する機会を提供することで、トリエステの共存が維持される、と考えたのである。⁽⁴⁾

さらにエディノストは一八八五年、トリエステ国立ギムナジウムのスロヴェニア語授業についても、州知事へ請願書を送った。州知事によれば、同校の教授、カール・グラザーが自ら、現行のスロヴェニア語クラスを二つに分け、その両方に授業を行うことを引き受けた。そこでこの請願書は、ギムナジウム三年と四年生にひとクラス、五年と六年にもうひとクラス、選択ではなく必修クラスを設置するよう、求めたのである。

一方で、一八五一年以降、同校では、スロヴェニア語が自由選択科目として教えられてきた。その後、受講者が増えると、三クラス、週二時間に増設されているし、スロヴェニア語話者の生徒たちから、これまで不満の声はあがっていない。それにもかかわらず、グラザー教授は無報酬で、さらなるスロヴェニア語授業クラスを引き受ける、と申し出たのである。⁽⁵⁾

都市のスロヴェニア語話者たちは、自分たちの子弟に、母語でギムナジウムの教育を受けさせたい、と熱望したのである。しかし、この要望は受け入れられなかった。報告書によれば、グラザー教授はこれまで、教育に対する情熱と技量を明らかに示したことはなかった。従って、このような超過勤務が、彼の義務である教育の課題をきちんとこなすことを妨げるのではないか、と懸念される。報告書は、つまるところ、彼の申し出が「彼の教育上の必要というよりも、民族の利益を」優

先させた結果である、と断じている。

州知事は、「ギムナジウムはドイツ語授業のための学校であり、ドイツ語に費やされる時間数は、教育プログラムの本質的な必要に応じている」と認識していた。一方で、同校にはイタリア語の選択授業も併設されていて、スロヴェニア語話者の生徒との均衡が取れている。だから州知事には、「内部の授業のやり方を変えることで、スラヴ的な要因が強調されたように見れば、結果として、多くのイタリア語話者のみならず、恐らくはドイツ語話者たちも、時が経つうちに、この学校を去ることになるだろう」という懸念があった。

州当局としては、「当地の国立ギムナジウムは、地域の民族の野望から距離を置き、統一された言語のきずなを育てることに献身する学校であるし、またそうでなければならない」という立場から、グラザー教授の申し出を拒否せざるを得なかったのである。実は州当局は、グラザー教授がエディノストの集会に出席していた事実も把握していて、学校の方針から遠い政治団体が、国立ギムナジウムの専門教員を論客として押し出すのは、異様な事実である、と批判した。⁶⁾

翌一八八六年には、同ギムナジウムが八年制を維持し、かつ、上級学年の非スロヴェニア語話者の、スロヴェニア語選択授業を続けるために、教員への支払いがとどこおっている、そのため、借入金による超過予算を許可されるように、との、ギムナジウムからの州庁への要請があったことが報告されている。⁷⁾ 州行政の側には、限られた予算の中で、まずもってドイツ語による高等教育を目指し、しかし教育においては地

域語への配慮も怠らない、しかもイタリア語話者とスロヴェニア語話者の平等を演出するという、微妙な均衡を保つ努力が強いられていた。

二〇世紀に入ると、トリエステとその周辺地域の富裕層にも、スロヴェニア人が参入するようになる。一九〇〇年には、市内の富裕層の居住区域チッタ・ヌオーヴァで、九%以上がスロヴェニア語を日常語とした、と報告されている。第一次世界大戦前夜、一九一三年の選挙では、年三〇〇グルデン以上の納税者から成る第一クーリエから、スロヴェニア人が八〇票を獲得した。⁸⁾ こうした人々の後押しを得て、一九〇四年、トリエステ市内に「人民会堂」が開かれた。これはスロヴェニア民族運動の象徴となる壮麗な建築物で、彼らの政治、文化、経済の中心となる役割が期待された。宿泊も可能であるほか、会議場、劇場、図書館としても機能している。⁹⁾

エディノストは全ての社会階層を取り込もうと活動したが、一八九六年に「ユーゴスラヴ（南スラヴ）社会民主党」が結成されると、特にトリエステでは、労働者階級、下層中産階級に加えて、インテリ層にも支持された。結果として、社会民主党はエディノストとは競合関係となったが、文化協会の設立を通じて、トリエステのスロヴェニア人の文化や政治の中心的な役割を担い、プロレタリアートの自己認識を高めた。¹⁰⁾ トリエステのイタリア人政治政党ナショナル・リベラル派は、男子普通選挙の導入に抵抗したものの、一九〇七年には、ハプスブルク君主国最初の男子普通選挙が実施された。ここで社会民主党は議席を伸ばし、州議会で第一党の地位を獲得した。¹¹⁾ こうしてトリエステでは、スロヴェニア

語使用が限定的であるとは言え、一定の地位を確保した。

第二章 三国国境地域のスロヴェニア人

1. 三国国境地域の住民

ハプスブルク帝国ケルンテン州の南部と、後のイタリアとユーゴスラヴィアとの「三国国境地域」は、それぞれドイツ語、イタリア語、スロヴェニア語話者の混住地域であった。ケルンテン州南部には、ゲマインデ（市町村）によって比率は異なるが、主にスロヴェニア人とドイツ人が居住していた。

このケルンテン州南部では、一八四八年以降もスロヴェニア・アイデントィティーはごく緩慢に形成されていたが、一八五五年のコンコルダート以降、小学校の設立が進んだ。当地の小学校は完全にカトリック教会の監督下に置かれていたため、例えばガイル川流域のトルマインでは、小学校のスロヴェニア語化が進んだ。

一方で村のエリートたちは、スロヴェニア民族運動から距離を置き、むしろドイツ語による知識の獲得を重視した。つまり、スロヴェニア語話者の間で、保守・聖職者・スロヴェニア語派と、リベラル・中産階級・ドイツ語派の分裂が生じていたのである。以後もスロヴェニア・リベリズムは育たず、両者の分裂は七〇年代を通じて、むしろ大きくなった。⁽¹⁾

それでも一八六一年以後、ゲルツ州議会の決定によれば、スロヴェニア語話者のゲマインデでは、スロヴェニア語を使用する、ということに

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家にあったのに

なった。それによって、より多くのゲマインデで、役所でのスロヴェニア語使用が進んだ。一八六四／六五年の、ケルンテンのスロヴェニア語使用地域では、授業語がスロヴェニア語の小学校が七三校、スロヴェニア語とドイツ語の二言語使用が一〇校、という報告が挙げられている。スロヴェニア語話者にとって、ドイツ語使用地域との商取引引きにドイツ語使用は欠かせなかったものの、スロヴェニア語による初等教育が広まり、公的なスロヴェニア語使用が可能になった場面が増えたことは確かである。⁽²⁾

状況が変化するのは、一八七九年に成立したターフェ内閣以降のことである。ハプスブルク帝国内で、ドイツ・リベラル派が勢力を失い、相対的に民族対立が顕在化し始めた。しかしケルンテン南部の混住地域では、カトリック保守派の反リベリズム・スロヴェニア語化政策は浸透せず、次第にドイツ語化が目立つようになった。例えばゲマインデ・エマースドルフでは、スロヴェニア語を日常語とする住民は、一八八〇年には九五・九%だったのだが、一九一〇年には四九・四%に激減している。⁽³⁾ また、スロヴェニア語使用地域と見られた国境地帯の小村ウゴヴィッツアでも、第一次世界大戦前の数年で、スロヴェニア語を日常語とする人口は、著しく減少した。⁽⁴⁾ こうした状況の中に送り込まれたのが、主任司祭ヨージェフ・クカチュカであった。

2. ウゴヴィッツアの言語問題

一九一一年五月一日、現在のイタリア北部、オーストリア国境近くの

小村ウゴヴィツァに、主任司祭ヨーゼフ・クカチュカが派遣された。パーメン出身、四六才であった。着任後すぐに、前年の洪水で破壊された墓地の修復や、川の整備に取りかかるなど、地域への貢献に熱心な人物だった。教会の活動にも積極的で、一九一三年には「マリーエン幼稚園」の設立、翌一四年に「イエスの心兄弟団」や「女子マリア修道会」の設立を申請し、同修道会には一二名の女子の入会をみた。⁽⁵⁾

しかしクカチュカが地域の権力と対立するのには、時間はかからなかった。村長フランツ・エアリツヒとゲマインデ議会議員たちは、役所語をスロヴェニア語とするよう要求するクカチュカを疎ましく感じ、また、彼が教会簿をスロヴェニア語で記録し始めたのを、問題視したのである。一九二二年一月二七日と一九一三年六月二三日、二度にわたってフィーラッハの上級行政機関からクカチュカに対し、村長に従うよう、指示書が届いている。⁽⁶⁾

ここで明記しておきたいのは、村長エアリヒは生まれながらのスロヴェニア人で、日常語もスロヴェニア語だった、という点である。にもかかわらず、ハプスブルク帝国の辺境の小村では、スロヴェニア話者エリートたちが、役所語をはじめとする「公式の言語」がドイツ語であることを、みじんも疑っていなかった。スロヴェニア語を日常とする者が、敢えて公式言語としてのドイツ語使用を受け入れたのには理由があり、①ハプスブルク帝国の事実上の共通語はドイツ語であり、中央官庁との書簡のやりとりには、ドイツ語が欠かせなかった。これと関わって、②ドイツ語使用は、帝国への恭順を示す指標となった。従って、③

ドイツ語能力は、地域のエリートの地位を保証する手段であった。と考えられる。それゆえ、主任司祭たるクカチュカのスロヴェニア語使用は、地方エリートたちに、とうてい受け入れられるものではなかった。一方この件で、クカチュカはフィーラッハに呼び出されたのだが、クカチュカ自身がそれを大いに不満に思ったの言うまでもない。⁽⁷⁾

クカチュカは彼を非難する、地方紙の無名の報告者に対し、「彼のゆりかごは、スロヴェニア人の家にあつたのに」と嘆いた。パーメン出身で、おそらくチェコ語を母語としたはずのクカチュカが、スロヴェニア語使用の権利を主張し、スロヴェニア人と対立するという、ある意味奇妙な構図である。⁽⁸⁾

この対立が終息することではなく、一九一三年九月、クカチュカが教会の屋根の修理費を村議会に提出すると、資金不足を理由に拒否された。さらにはクカチュカが、一九一四年一月一八日から二五日の間、入念な準備の上、多数の住民が参加する伝導会を開催した際、村長らがわざわざ同じ時期にダンスパーティーを開いて、住民たちの参加を妨害した。クカチュカにとって、飲酒は敵であり、「酔っぱらい、特にシユナプスを飲む輩はまさにペストであり、彼らが全ての良い芽をつぶす。」として厳しく糾弾した。さらにはシユナプスを売る「リベラル派の酒場」や製造業者も、「精神の屠殺者」であり、彼らと共に、「そのレシピによって人々を救うとする」社会民主主義者もまた、クカチュカの批判の対象となった。⁽⁹⁾ クカチュカの熱意は伝わってくるものの、その熱意が裏目に出た可能性は否定できない。

その後もクカチュカの一存で、聖堂係兼オルガニストを解雇した件が問題にされ、村議会はこれを機に、クカチュカの異動要求を決議した。この件についてクカチュカは、一九一四年五月六日付けの領主司教事務局宛ての報告書で、詳細に説明している。聖堂係の任免は、純粹に教会に関わる事項であり、世俗の議会のあずかり知らないところであるはずである。この聖堂係ローレンツ・クラカーは、禁じられている期間に酒場でダンスパーティーに参加し、若者たちの放縦なふるまいに手を貸し、また、少女たちが信仰を深めるためのマリア講に出席するのを妨害した。さらにクカチュカの罷免を求める署名を集めた。これは明らかに、敵による闘争のやり方である、と訴えている¹⁰⁾。

ゲマインデ議会は、クカチュカこそが人々の間に対立を起こさせる元凶であると非難したが、村民の中には、クカチュカを熱心に支持する者たちもいた。彼ら三五名によれば、スロヴェニア語使用を強固に主張するクカチュカが対立の原因のではなく、そもそもこの問題に村長が無関心であることが問題なのである。住民は、クカチュカが書いたスロヴェニア語も、スロヴェニア語による説教も理解できる。ウゴヴィツァに聖職者が不在だった数年の間、スロヴェニア語使用の多数派に対する、支配的な少数派の不正が、すでに問題になっていた、というのが支持派の見解である。最終的には領主司教事務局によって、クカチュカの配置換えはない、と決定され、一九一四年六月二十七日、州議会で報告された¹¹⁾。

こうしてクカチュカは、苦戦を強いられながらも、かろうじてウゴビツァのゆりかごはスロヴェニア人の家にあったのに

ヴィツァでの地位を保つことができた。しかし第一次世界大戦の開戦と共に、状況は一変する。一九一四年九月九日、クカチュカはカンポロッソ・ルツァーリ駅で、ウゴヴィツァ行き切符をスロヴェニア語で買い求めた際、駅員はそれをドイツ語で言うように要求し、口論となった。フィラッハの国家鉄道事務局はこの件で、領主司教局事務所に、クカチュカは民族主義敵な扇動者で、戦争の敵国であるはずのセルビア親派であると報告し、その罪を訴えた¹²⁾。

これ以降もクカチュカは、提出を求められたゲマインデ住民簿をスロヴェニア語で記入してフィラッハの上級行政機関と対立を起こし、さらには一二月二日の皇帝祝祭日の儀式で、ドイツ語での国歌斉唱の際に祭壇を離れたとして批判を受け、ついには軍の容疑者リストに載せられた。一九一五年にイタリアが参戦すると、ケルンテン州では地方警察と軍官僚が権力を掌握し、クカチュカは彼らの標的となった。五月三十一日、クカチュカは教会の塔から、イタリア人に明かりで合図を送っていた、という疑いで逮捕され、六六日間にわたって拘留されたのである。領主司教ヘフターのとりなしも、この拘留を妨げることはできなかった¹³⁾。

クカチュカは住居をブライブルクへ移すことを余儀なくされ、ついにはクカチュカを擁護し続けた領主司教ヘフター自身が、クカチュカに異動を勧める事態となる。そして一九一六年八月二十八日、クカチュカは異動願いを提出し、翌日、これが受理された。ノイハウスへ移ったクカチュカは、新たな辞令を待ち続けた。その間クカチュカは、異動願い撤

回の書状を領主司教事務局へ送ると共に、再びウゴヴィツァへの着任を希望し続けたのだが、その努力は徒労に終わった¹⁴。

ほぼ二年が過ぎ、クカチュカは一九一八年七月一日、サンクト・マルガレーテンへの赴任を決めるが、ここでもドイツ民族主義者たちと激しい対立を起こした末、二一年三月一日に再び離任を余儀なくされた。臨時職として数カ所への赴任を経たのち、一九三四年フェロラッハへ着任、三七年に死去するまで、司祭の職をまっとうした¹⁵。

都市トリエステとは事情が違って、ケルンテン南部辺境の小村ウゴヴィツァでは、公共の場でのドイツ語使用が通例となっていた。圧倒的多数のスロヴェニア語話者の住民たちの中には、自分たちに寄り添う主任司祭クカチュカに共感を覚えた者も少なくなく、彼らは一定の支持を表明した。しかしこのスロヴェニア語対ドイツ語の争いは、ハプスブルク帝国の崩壊に向けて、国民国家の国境線に従い、おのずと決着がつけられたのである。

むすびにかえて

二〇世紀初頭のトリエステ市では、イタリア人に対抗するスロヴェニア人の運動が次第に高揚し、一方で地方の村落、たとえばウゴヴィツァでは、ドイツ語使用を主張するスロヴェニア人エリートたちが、スロヴェニア語使用を忌避した。ここにハプスブルク帝国内の多数派、ドイツ語話者たちは登場しない。だが第一次世界大戦が勃発し、イタリアが同盟国側に立つて参戦すると、この混住地域では、ドイツ民族主義者た

ちもまた、沈黙を守ることができなくなっていた。

イタリア人、スロヴェニア人との混住地域であったトリエステと、アドリア海沿岸地域キュステンラントのドイツ人たちは、「ドイツ民衆会議」を結成し、自分たちの要求を政府に提出するようになる。その要求のひとつが、トリエステにドイツ語を授業語とする商業学校を設立せよ、というものであった¹⁶。戦争が終結すれば、トリエステが再び商業の中心地となるであろうし、そうならば、ドイツ語を母語とする商業者の育成が欠かせない。だから商業専門の中学校、高等学校、そして大学を設立しなければならない、と主張する。

すでにトリエステには、イタリア語を授業語とする、国立商業アカデミーがあるのだが、これをドイツ語授業語の学校に変え、内陸のドイツ語を母語とする家庭の子弟を受け入れよ、というのである。その理由は、このアカデミーは、「イタリアの一地方の学校ではなく」、当校では世界通商を学ぶ、オーストリア人を育てる必要があるからだ。大学についても、授業はドイツ語でのみ行われるのだが、それは、「ドイツ語はオーストリア唯一の言語であり、同時に世界語でもある」からである。

一方で、トリエステには、当地の豪商レヴォルテッラの基金による商業大学があるが、それはイタリア語を授業語としていて、地域の学校にとどまっている。そればかりか、公的な基金によって設立されているにもかかわらず、イタリアの「失地回復運動」イレデンティズムの温床となっている、と糾弾している。

この要望書は注意深く、「この学校の言語の問題は、どんな条件下にあって、政治的な案件と見なしてはならないし、またそうすべきではない」と付け加えているものの、ドイツ語のみを授業語とし、国家によるドイツ語話者の教育を主張する限り、彼らが主張する学校行政が政治的な案件でないとの主張には、かなりの無理がある。「トリエステのドイツ人の利益は、国家のそれと完全に一致している」という結びの文が、まさにそれを示している。当ドイツ民衆会議は、第一次世界大戦後もハプスブルク君主国が存続し、またトリエステが帝国に帰属するするものと考えた上で、ドイツ語話者である商業の専門家の育成を願ったのである。^②

さらに大戦末期には、同じドイツ民衆会議から、同じくトリエステにドイツ語を授業語とする航海学校の設立を前提に、生徒を募る公募が行われた。これは初等・中等教育を終えて、航海技術を取得しようとする生徒のための全寮制の学校で、大戦後の商船の下級・上級乗組員を育成する目的を持っていた。入学願書の提出期限が一九一八年の八月なかばであることから、彼らは予見していなかったが、ハプスブルク帝国の崩壊が決定し、設立は実現しなかったと見られる。

だが、彼らが戦局をどれほど見越していたにせよ、やはりドイツ語話者の船員を育成しなければならないという、切実な希望を持っていたことは確かである。入寮者の持ち物は、「上質の、使用に耐える状態の、望ましくは地味な色の冬の上下／上質の、使用に耐える状態の、望ましくは地味な色の部屋用上下……三着の寝間着／六枚の下履き／一二枚の

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家にあったのに

ハンカチ／八枚の靴下、もしくは長靴下／三枚の固いシャツ襟／六枚の柔らかいシャツ襟……」といった着衣に始まり、夜具、さらにはカトラリーから浴用品など、微細にわたって指定されている。恐らくは上級船員の職を経験した者が、若い生徒たちを指導しようと、知恵を絞ったに違いない。^③

トリエステのドイツ語話者たちの希望もむなしく、第一次世界大戦の終結と共に、市はイタリアの領土となった。三国国境地域では、終戦後にも武力衝突が起きたが、たとえばウゴヴィッツアを含む、ケルンテン州の南部カナルタール地域は、イタリアへ編入された。その一方で、ケルンテン州の北部については、一九二〇年一月一日になって住民投票が行われて、オーストリアへの帰属が決定した。^④以後、同地域でも二言語学校は徐々に禁止され、ドイツ語化が顕著になる。バホヴェッツが指摘するとおり、三国国境地域は、「三分割された後、…統合的なナシヨナリズムのドクトリンに従って、…民族的に均一化された」という結果になった。^⑤

はじめに・註

(1) Eva Kral, *Die Italiener aus slowenischer Sicht*, Wien, 1997, *Diplomarbeit*, 20 (以下、Kral, 1997と略す)。

(2) すでに一八四八年革命以後、トリエステのイタリア語話者たちは、その子弟たちをドイツ語を授業語とする国立ギムナジウムに通わせると共に、同校にイタリア語クラスを設置するよう要求し始めた。参照、佐々木洋子「なに語で授業を受けるのかーハプスブルク帝国の教育制度と辺境都市」、

平田雅博・原聖編『帝国・国民・言語―辺境という視点から』、三元社、二〇一七年、四九―七五ページ／同「一九世紀トリエステにおける国立ギムナジウムの授業語」、『青山史学』第三十五号、二〇一七年。

- (3) Marina Cattaruzza, Nationalitätenkonflikte in Triest im Rahmen der Nationalitätenfrage in der Habsburger Monarchie 1850–1914, in: *Deutschland und Europa in der Neuzeit. Festschrift für Karl Omar Freiherr von Aretin zum 65. Geburtstag*, Herg. von Ralph Melville, Claus Scharf, Martin Vogt und Ulrich Wengenoh, Stuttgart, 1988, 710–712. (以下‘Cattaruzza, 1988, と略す。’) (4) *ibid.*, 717. カッタールツァによれば、この時期、実際にはスロヴェニア人の流入は停滞していた一方、イタリア王国からの移住者が増加していたので、この批判自体、当たっている。A. a. o.

- (5) Kral, 1997.; Sacha Zala(Hg.), *Die Moderne und ihre Krisen. Studien von Marina Cattaruzza zur europäischen Geschichte des 19. und 20. Jahrhunderts*, Göttingen, 2012.; Tina Bahovec / Theodor Domej(Hg.), *Das österreichisch-italienisch-slovenische Dreiländereck. Ursachen und Folgen der nationalstaatlichen Dreiteilung einer Region, Klagenfurt-Celovec / Laibach-Ljubljana / Wien-Dunaj*, 2006. (以下‘Dreiländereck, 2006, と略す。’)佐々木洋子、「トリエステにおける民族分化―超民族都市から民族対立の舞台へ」広末雅士編著『越境者の世界史』春風社、二〇一三年、二三―五二ページ／同「イタリア・イレデント運動とトリエステ住民」広末雅士編著『海と陸の織りなす世界史』春風社、二〇一八年、二三―五二ページ

第一章・註

- (1) Cattaruzza, 1988, 715.
(2) Kral, 1997, 20.

- (3) カッタールツァは、エディノストの設立について、「(トリエステの)スロヴェニア人の民族意識は、イタリア人との二極化の中でまず形成された。」と指摘している。cf. Cattaruzza, 1988, 718. ただし、同時期に活動していたスロヴェニア人協会の多くは政治的活動に無縁であり、例えば合唱協会の場合、カトリック・王党派であり、集会はいつも、皇帝への万歳で締めくくられた。A. a. O.

- (4) Österreichisches Staatsarchiv, Allgemeine Verwaltungsarchiv, Unterricht Allgemeine, Fasz. 3832 Sign. 16A-B Küstenland / Triest, (以下‘AVA. Küstenland, と略す’) Triest, 21. Aug. 1881 州知事より文化・教育大臣へ

- (5) AVA. Küstenland, 13. Jan. 1885. 在トリエステ州知事より文化・教育大臣へ。なお、ギムナジウムの専任教員は「教授」である。

- (6) *ibid.* さらに報告書は、エディノストが、スロヴェニア語授業を午前の最後に置いていることを非難していることにも言及している。これに対し、必修ではない授業は最後に置く以外にどうしようもない、こうした要求をする者は、事実を正確に理解できていない、もしくは自身の民族的な過剰な情熱にひたっているということを、否定できない、と、エディノストに対する厳しい批判も見られる。なお、ギムナジウムの授業は、原則午前中で終わることになっていたため、選択授業を取らない生徒は、早く授業を終えて帰宅できた。

- (7) AVA. Triest, Küstenland 15. Sep. 1886, 州知事より文化・教育大臣へ。同報告の中で、受講者が減らないため、一八八六年の一〇月、十一月、十二月分の教員への支払いの手段はすでになく、一八八七年度についても同様である、として、国立ギムナジウムが、借入金によるぎりぎりの経営を行っていることが示された。

- (8) Cattaruzza, 1988, 720, 市内から離れたスラヴ人居住地域にも、銀行資本が投

下されるようになり、一九〇一年にはリュブリャンスカ・パンカが、また一九〇五年にはヤドランスカ・パンカが設立された。A. a. O.

(9) A. a. O.; Kral, 1997, 22.

(10) Kral, 1997, 21f.

(11) Catanzza, 1988, 721. ユーゴスラヴ社会民主党とイタリア社会民主党トリエステ支部は協力関係に入ったのだが、それでも労働者階級の民族分化は進み、労働市場内での線引きは避けられなかった。A. a. o. なお、一九一〇年の市議会による民族別人口調査および州庁による調査の結果は以下のとおりである。市議会はイタリア人議員が多数派だったため、イタリア人人口が多く、クロアチア人人口が少なく数えられている。

市議会および州庁による民族別人口調査（一九一〇年／人）

	市議会による調査結果	州庁による調査結果
イタリア人	一四一、五〇九	一一八、九五九
スロヴェニア人	三六、二〇八	五六、九一六
クロアチア人	一、一九五	二、四〇三
ドイツ人	九、三三九	一一、八五六
計	一八八、一五一	一九〇、一三四

(Catanzza, 2012, 219より訳出)

第二章・註

(1) Janez Cvim, *Nationale Differenzierung und politische Verhältnisse im Dreiländereck* (1848-1918), in *Dreiländereck*, 211, 218 (以下、Cvim, 2006と略す。) クヴィルンは、ゲリアツハ市長ミロニツヒが、宗教の授業を禁止し、牧師の学校への立ち入りも、学校でのスロヴェニア語の使用も禁止した、という事例を紹介している。A. a. o.

(2) Cvim, 2006, 215.

(3) Cvim, 2006, 222. クヴィルンは、当地では社会民主党の影響が強く、そのた

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家にあったのに

め、ドイツ・ナショナリストによって組織されたケルンテン農民同盟の、「民族的帰属から独立すべき」、つまり、ケルンテンのスロヴェニア人を、そのナショナリティーや母語によって認識するべきではない、という主張が浸透した、と説明している。A. a. o.

(4) Cvim, 224. ウゴヴィッツァにおける一八八〇年から一九一〇年の日常語の変化は、以下のとおりである。(人)

	スロヴェニア語を日常語とする者	ドイツ語を日常語とする者
一八八〇年	九九四	二一
一八九〇年	九四〇	四三
一九〇〇年	八一七	八二
一九一〇年	五九一	二四七

(Cvim, 2006, 229. より訳出)

(5) Cvim, 2006, 231. 現在のウゴヴィッツァは、イタリア最北部のマルボルゲツト・ヴァルブルーナの行政区に所属しているが、一九三九年までは独自の自治体で、当時の人口は六〇〇人、一九九五年には四〇〇人が住んでいた。

(6) Cvim, 2006, 232. クカチュカは、ドイツ語が役所語である、と公示されていた書類を、スロヴェニア語で書いてゲマインデ議会に送った。こうした態度に対し、村長らは、故郷のペーメンからクカチュカを家族が訪ねて来たところを、外国人の滞在を届け出なかったという理由で、警察官を派遣している。A. a. O.

(7) Cvim, 2006, 233. まず村長に呼び出されたクカチュカは、最初からスロヴェニア語で話し始め、これを聞くや否や村長は、「毒蛇にでも噛まれたかのよう

に飛び上がり、…無意味な言葉でののしり始めた。」A. a. O.

(8) Cvim, 2006, 235.
(9) 伝導会についての、クカチュカより領主司教事務局への、一九一四年二月一九日付けの報告書。Cvim, 237. なおシュナプスとは、アンズやプラムか

ら作られる、比較的安価な蒸留酒である。

- (10) Cvim, 2006, 239f.
- (11) ウゴヴィッツァ住民より領主司教事務局への、一九一四年五月二一日付け請願書。このほかにも、クカチュカが聖堂係を最大限寛容に扱ったにもかかわらず、聖堂係がクカチュカの業務を妨害していたこと、また、クカチュカの罷免に住民が署名したのは、そもそも彼らが、自分たちが何に署名しているのか知らなかったことが挙げられている。Cvim, 2006, 240f.
- (12) 切符を売ろうとしなかった鉄道員は、彼を「しつこいセルビア人」として扱い、クカチュカを追い払おうとした。そこに居合わせた司祭エーリツヒが待合室へ入ってきて、カンポロッソでは、ドイツ語とスロヴェニア語が執務語であるはずだ、と仲裁した。しかし鉄道事務局としては、今までカンポロッソとその周辺の住民は、今まで駅の方針に文句をつけたことはなかった、として、不満を隠さず報告している。国家鉄道事務局より領主司教へ、一九一八年九月一六日付け報告。Cvim, 2006, 244f.
- (13) Cvim, 2006, 245f. グラーツの軍事裁判所は無罪判決を下して、八月四日に釈放された。
- (14) Cvim, 2006, 248f. この間ヘフターは、クカチュカを擁護する匿名の手紙を受け取っている。その手紙によれば、クカチュカはスロヴェニア語使用を主張したから排斥されたのではなく、その職務を遂行する熱意が原因である、とした。酒飲みに説教した結果、酒場の経営者たちが、彼らの客が離れていくのを恐れたためだ、と説明している。A. a. O.
- (15) Cvim, 2006, 251. 臨時職にあつたクロスター・グリッフェンで、一九三三年九月九日にクカチュカは、退職を願い出ている。詳細は不明だが、ナチス・ドイツの台頭とドイツ民族主義の浸透に無関係ではないと推測される。

むすびにかえて・註

- (1) ドイツ民衆会議 *der deutsche Volksrat* は、第二次世界大戦後のソ連占領地域で一九四八年に結成されたものがよく知られているが、すでにこの時期のハプスブルク帝国内にも、同名の組織が作られていた。ただし、こういうメンバーがどういう契機で集められたのかは不明である。cf. AVA, *Küstenland, Zur Frage der Errichtung einer deutschen zweikalssigen Handelsschule für Kanaben, einer deutschen Handelsakademie und einer deutschen Handelshochschule in Triest. Der deutsche Volksrat für Triest und das Küstenland*, Triest 18. Aug. 1916.
- (2) ただしこの要望書は、ドイツ語話者の子弟のみの教育を目指していたわけではなく、大戦後のオーストリアがオリエントを通商の利害地域にするであろうと考えて、「アルバニア、ギリシャ、トルコの商業者たちは、彼らの子弟たちを教育のために、トリエステへ送るだろう。ブルガリアにも可能性はある」と述べている。ibid.
- (3) AVA, *Küstenland, Kundmachung über die Eröffnung einer k. k. Schifffahrtsschule mit deutscher Unterrichtssprache in Triest in Verbindung mit einem Schüler-Internat*, 二〇世紀初頭の男子生徒が何を持って航行学校の寮に入寮するべきか、こと細かに記されている点が、興味深い。以下が全訳である。

上質の、使用に耐える状態の、望ましくは意味な色の冬の上下／上質の、使用に耐える状態の、望ましくは地味な色の、部屋用上下／上質の、使用に耐える状態の、望ましくは地味な色の、冬用コート／（望ましくは）ナイトガウン／バイザー付き帽子（船団協会のものに似ている、エンブレムなしのもの）／帽子／揃いの上質で丈夫な靴／揃いの部屋履き／二枚の綿胴着（望ましくは）／四／六枚の日常シャツ／三着の寝間着／六枚の下履き／一二枚のハンカチ／八枚の靴下、もしくは長靴下／三枚の固いシャツ襟／六枚のやわらかいシャツ襟／三本の

ネクタイ／三組のカフス／四枚のナプキン／四枚のタオル／一枚の水泳パンツ／四組のリネン布と枕カバー／一枚の暖かい冬毛布と夏がけ／一枚の馬毛、もしくは海草製のマット。望ましくは三つに折れるもの。一八〇×八〇cm／一つか二つの枕／一組のコーヒースプーンを含めたカトラリー／一つのナプキンリング／服用ブラシ／靴ブラシと靴磨き剤／櫛／歯ブラシ／浴用タオル／石けん入れと石けん／歯磨き剤／グラス2つ／一つの上質に仕上げられた裁縫セット、特に白糸の糸巻きひとつと、暗色の糸巻きひとつ、それは修繕を行う際、寮の用務婦に渡すため／一本の雨傘／一組の冬用手袋／一組の製図用具／一本のペン削りナイフ。

なお、全ての衣類と用具には、それぞれ生徒に与えられた寮番号をふるこ
とになっている。また、入寮の際、私物リストは二枚の写しと共に、寮長
に提出される。A. a. O.

- (4) Tina Vahovec, *Der integrale Nationalismus im Dreiländereck (1918-1945)*, in: *Dreiländereck*, 261. (以下、Vahovec, 2006と略す) 住民投票の結果、有権者の五九・〇四%がオーストリアへの帰属を希望した。そして戦間期のスロヴェニア語使用の市町村では、ドイツ語の地名が強制され、また、小学校で教師が生徒の名前をスロヴェニア語名からドイツ語名に勝手に変更する、という事件も起きている。ibid., 267f.

- (5) Vahovec, 2006, 265. とは言え、現在も北イタリアの村落として残るウゴヴィッツァの住民の日常語は、主にドイツ語とスロヴェニア語であり、自警消防団の命令語はドイツ語だという。

彼のゆりかごはスロヴェニア人の家であったのに